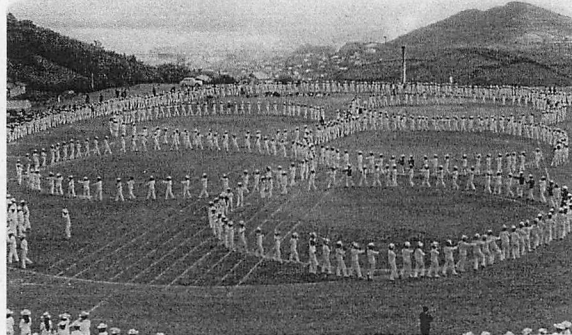


桜陽会裏話

「55年前の聖火リレー」

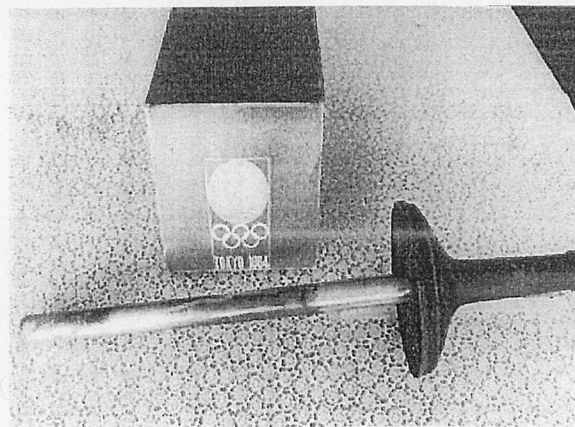
高校17期 桜陽会相談役 本間 達洋



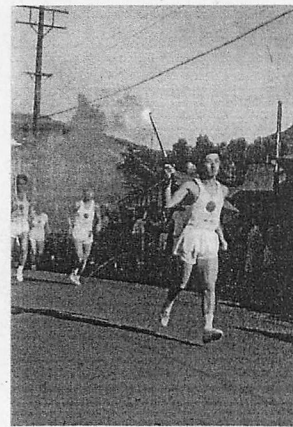
桜陽祭(体育祭)東京五輪音頭 昭和39年9月28日(筆者撮影)

平成30年度ご卒業の皆様おめでとうございませう。高校71期として109年の歴史を持つ同窓会「桜陽会」の一員となられ、心から歓迎申し上げます。又、本年は5月1日をもって平成に別れを告げて新元号になり、新天皇が即位されるという特別な年であり、皆様にも印象深い年となることでしょう。更に、来年は56年ぶりにオリンピック東京大会が開催されることで、各種ブレ五輪行事の多い盛り上がる一年であろうと予想されます。今回は、55年前の昭和39年(1964)に桜陽高校3年生としてオリンピックという一陣の風の中を過ごした、私の思い出を記させていただきます。

当時私は前年11月1日に成立した高橋執行部(総勢37名)の一員でした。現在の生徒会執行部と同様に最大のイベントが、9月25日から4日間にわたり開催予定の桜陽祭(当時は前日祭、文化祭、体育祭)ですから、夏休み明けには準備にかかるとは思いますが、この頃すでに街中というか国中というか三波春夫の唄う「東京五輪音頭」が鳴り響き、いやがうえにもオリンピックムードが盛り上っていました。そんな中、執行部体育委員長でクラスメートの花野芳幸君がオリンピック聖火リレー正走者に選ばれたのです。彼は西陵中時代から陸上中距離の実力者として有名で、なおかつ執行部体育委員長ですから、まさに適任です。以下は、花野君が保存していた当時の資料(小樽市における聖火リレーの詳細、写



聖火トーチ



正走者 花野芳幸君
(以下は花野君所蔵写真)

真等)をお借りできましたので、時間を追って記述したいと思います。

昭和39年8月25日付の新聞に、「オリンピック東京大会国内聖火リレー道実行委員会は8月24日、聖火リレー北海道コースの正走者187人、副走者356人、随走者3,560人を最終決定、これを発表した」という記事が出て、北海道における聖火リレーがにわかに現実のものとなり、遠い東京での話のように思っていたオリンピックも身近に感じるようになりました。テレビがかなり普及していたとはいえ、現在と違って情報が限られていた時代のことです。道内聖火リレーの全行程は、聖火が飛行機で到着した千歳からスタートして札幌、小樽を通じて函館、銭函星置橋から蘭島駅前までの18区間に分けられ、正走者18名、副走者36名、随走者3,600名によって、18のグループが聖火をつなぐものでした。

第1日目の9月11日、午後1時30分に札幌から引き継ぎ星置橋をスタート、午後3時19分に小樽市民会館着、一泊して翌9月12日午前9時に小樽市民会館出発、市内繁華街、龍宮神社下を通って国道5号線を走り、午前10時16分蘭島駅前で次の余市聖火ランナーに引き継ぎます。

花野君は、1日目の10区、当時のアジスキー前から住吉神社までの1.5キロを副走者(2名共桜陽高校、随走者(桜陽高校15名、長橋中学校5名)と共に無事に走り、大役を果たしました。

今思えば聖火リレー正走者に選ばれたことは大変に名誉なことだったわけで、新聞には小樽市の正走者18名の個人紹介とインタビューが掲載されているほどです。それによると、正走者の内訳は、学大札幌分校2名、ミツウマ4名、国鉄1名、潮陵高校2名、桜陽高校2名、北照高校2名、千秋高校2名、緑陵高校2名、水産高校1名の18名(校名等は当時のまま)。桜陽高校は花野君と定時制4年柴橋君の2名でした。又、副走者、随走者は市内各高校、中学校運動部の中心選手が選ばれて各グループに配分されていますが、中学生も随走者で参加していたことは、花野君の資料を見て初めて知りました。この2日間わたる聖火リレーの人氣は凄く、沿道、中心街共応援や見物人で大変な混雑ぶりでした。私の見た聖火は、トーチの先端から炎だけが出ているものと思っていたのが、やたらと白煙が多く、かなり後方までたなびいていたのが印象的でした。

聖火リレーが終わってまもなく9月25日から桜陽祭でしたが、聖火リレーで盛り上ったこともあり、最終日の体育祭では、全員で5つの輪になって東京五輪音頭を踊り、大盛り上りのうちに終了。2週間後の10月10日によいよ本番のオリンピック開会式を迎えます。バラバラ入場で有名な10月24日の閉会式の頃は、もう私達は浮かっている場合ではなく本腰を入れて受験勉強しないとまずいという時期になっていました。

生徒会は翌11月に次の吉崎執行部に引き継ぎ



10区の聖火ランナー記念写真(前列中央 花野君)